A.ザロモンの初期著作に見る社会政策提言の真意

—1898年～1908年

岡　田　英己子

＜要旨＞

本稿でも近年の『人文学報』掲載の拙稿に引き続き、ザロモンに過剰に張り付く「母性」言説の由来を探った。今回はフェミニズム論と社会事業・教育論とを同時に取り上げて論陣を張りたがる初期のザロモンの代表作を取り上げた。ザロモンの虚像のベールを剥ぐ鍵も、実像に迫る秘訣も、そのフェミニズム論の読み解きにある。それは「母性」言説の肯定でも、否定でもないからだ。初期著作のフェミニズム論は恣意性に満ちている。社会事業・教育論はまだましなのだが、それでもBDFと絡む論稿ではポリティクスが散見される。要するに、BDFの組織戦略が渦巻く時期に書かれた初期著作を読み解くにはコツがいる。そこで彼女の社会政策提言の実現可能性を斟酌しながら、行間に埋め込まれた真意を拾い出した。

＜キーワード＞

A.ザロモン、H.ランゲ、G.ボイマー、フェミニズム、母性、BDF、ICW

Ⅰ．序

Ⅰ－1．問題の所在と研究の課題・方法

1．ザロモンの社会政策提言の真意を読み解くために

経済的自立と政治的平等。フランス革命の息吹に触れるフェミニストの要求はこれにつきる。前世紀転換期に台頭する第一波のフェミニストの多くはそれに与する。それなのに、なぜ、欧米でも日本でも、1970年代から80年代にかけて、第一波フェミニズムの主流派が母性に拘泥し、性別役割を強化したと声高な批判をするのだろうか。

20世紀初頭に母性を掲げる筆頭は、欧米では宗派系福祉団体や主婦団体である。むろん「反」フェミニズムも男女の能力差を過剰に強調し、同時に母性賛美も惜しまない。母性と平和を連結し、労働者の結束を図るのは社会主義陣営も熱心であった。だから、どうしても20世紀初頭からの論争には「母性」言説が横行しやすくなる。母性を標榜すると、確かに母性・乳幼児保護分野での女性雇用策は推進しやすく、女性の経済的自立も進む。国際女性評議会（International Council of Women, ICW）と、そのヨーロッパ支部的な創設経緯をもつドイツ女性団体連合（Bund Deutscher Frauen vereine, BDF）に集う第一波フェミニストの一群は、社会政策の趨勢から、そう予見していく[1]。

こうして合衆国とドイツが先陣を切る形で、女性雇用策の一環で福祉職と社会事業教育の制度化が促される。この戦略は近隣諸国でもほぼ共時的に登場する。さらに参政権運動に拠る政治的平等に一定の見通しがつく1910年頃からは、社会政策・社会事業教育分野での仕事が「同一価値労働・同一賃金」への突破口を拓くとの期待もでてくる。

1909年、ICWで実質的にヨーロッパ諸国を束ねる事務局長に就任するアリス・ザロモン（Alice Salomon,1872-1948）は、国内外でその代表格の一人と目される。1906年にフンボルト大学に提出する博士論文は、ザロモンをBDF社会政策の看板娘にしただけでない。BDF上部組織のICWでも注目される。ICWは参政権以外に活路を見出したがっていた時期で、ICW会長レディ・アヴァディーン（Lady Aberdeen）はその立場上、イギリスとカナダの女性労働者政策の趨

勢に詳しかった。これがザロモンのICW抜擢に繋がったと思われる。

福祉職を突破口にして、「母性」言説を張り付けて「同一労働」を「同一価値労働」と解釈させて、女性の職業自立を図るとの苦肉の策。ザロモンはヨーロッパ大陸でその先陣を切り、そのための社会事業・教育論を編んでいく。むろんこうした女性の本質を売り物にしながら、同権の労働条件を獲得するとの策が、どこまで現実味があり、成功と評していいのかの判断は、今もなお難しい。現実には欧米のどの国も二度の世界大戦と、ジェンダー秩序の厚い壁に阻まれ、北欧福祉国家群でさえも1960年代に入るまでは、「同一価値労働・同一賃金」を定着させることも、女性の二級市民化を防ぐこともできなかったからである。

これには副次的要因として女性史やフェミニズム論の歴史研究の遅れも深く関与する。実は1920年代に保守化するとされる第一波フェミニズム運動の実態は、国際比較も含めて空白箇所が目立つ。にもかかわらず既存の女性史テキスト類の多くが、孫引き的な第一波批判の記述を繰り返す傾向がある。その理由は次のように要約できる。

1）第二波フェミニズム運動の1970年代からの戦略は自説の正当化を優先させ、過去との対決を明快にし過ぎた。第一波は穏健すぎて保守化し、「母性」言説でもって女性の二級市民化を強化していくと批判した[2]。これはドイツ語圏に関しては「精神的母性」を第一波の特徴と記す例に代表される。

2）さらにドイツ語圏に関しては東西ドイツの政治体制擁護論の影響も看過できない。冷戦体制による史資料解釈の偏在が、「誰が真のフェミニストか」の査定に逸脱をもたらし、結果的にドイツ女性史の研究進展を妨げてしまう。女性労働者問題に関わる社会主義フェミニストに過剰に高い評価を与え、そこに平和と「母性」言説も重ねてしまうドグマから抜けきれない。社会主義フェミニストから揶揄されるBDFが、前世期転換期には女性労働者問題にかなりの関心を持っていたにもかかわらず、なのである。ここより意図せざる結果として、第二派の影響下で刊行されるドイツ女性史にもこの種の偏在した史資料解釈が浸透し、ICWやBDFのいわゆる穏健派は女性労働者問題に疎く、しかも第一次世界大戦を境に保守化したと、断定さ

れてしまう[3]。

Ⅰ－2. 研究の課題・方法

1. 課題

1970年代後半にまずドイツで、次いで合衆国と日本の研究者が取り組むドイツ女性史が、「母性」言説を過剰に取り込んでしまう理由は、上の二点につきる。1980年代のザロモン研究はその影響をもろに受ける。それだけに、ザロモンへの研究関心は今も続いているのだが、福祉職の創出をめぐる評価は分かれたままだ。母性主義者で進取的な女性運動を抑制し、福祉職の低賃金を容認するとの「通説」も根強く定着している。これはドイツ語圏だけでない。合衆国や日本でも女性史/ジェンダー史の研究対象として取り上げられ、「ジェンダーとソーシャルワーク」関連では頻繁にその名前が出るようになって四半世紀以上もたつのに、こうした批判は払拭されない。なぜなのか。

「通説」が是正されにくい理由は幾つかある。すでに筆者はザロモン側の国際ソーシャルワーク教育界向けの巧みな情報操作や（岡田[2011]）、最初の活動拠点になるボランティア・グループがフェミニスト集団と見られることを隠す面を明らかにし（岡田[2009]）、同時に第二波フェミニスト世代による歴史研究の偏りも指摘してきた（岡田[2010]）。本稿でも引き続きザロモンに過剰に張り付く「母性」言説の由来を探っていく。

今回はザロモンの初期著作に着目する。というのは、これまでにザロモンを取りあげてきた多くの女性史/ジェンダー史がザロモン初期著作の同一箇所、即ち「母性愛を家から自治体へ」を引用し（Salomon[1901]9）、そこから中年以降に彼女が編む社会事業・教育論もそのようなものと推測し、福祉職に「母性」言説を張り付ける張本人との批判を追認してきたからである。その筆頭はU.フレーフェルトなのだが（岡田[2010]38）が、「母性愛を家から自治体へ」の孫引きは連綿と今も続く。一例を挙げよう。1983年に初版刊行で、現在5版を重ねるドイツ語圏で最もポピュラーな社会福祉史テキストは、改訂版では最新の女性史/ジェンダー史も参考文献に追加する。にもかかわらず、記載は旧態依然。「精神的母性」が標榜され（Wendt[2008⁵]480）、ザロモンは「母性愛を家から自

治体へ」を提唱し（Wendt[2008s]481）、グループは「女性解放を取り扱わない」と記す（Wendt[2008s]483）。つまりザロモンのフェミニズム論と社会事業・教育論とを一枚岩的に見なす風潮が持続するのは、この種のテキストにも原因があるといえよう。

フェミニストが「母性」言説を使用する主目的は、「母性愛」を強調するためではない。ましてや家庭に女を戻すためではない。台頭する反フェミニズムとの拮抗の中で、あるいはフェミニズム運動と国家官僚との接近の中で、用いられた。そんなことは常識的にわかるはずだ。だから問われるべきフェミニズム論著作の分析視点は、次のようなものだ。「では、何のために母性を使うのか」「ザロモンの意見なのか、他者の見解紹介なのか」「ザロモンの口調は同じなのか、それとも場に応じて違うのか」等々である。

2. 方法と分析視点

これをふまえて本稿では、フェミニズム論と社会事業・教育論とを同時に取り上げて論陣を張りたがる初期の代表作を取り上げ、それを後の執筆姿勢と比較させながらザロモン社会事業・教育論の研究史的位置づけを試みる。1898年のBDFハンブルク総会で才を見込まれ、BDF社会政策の看板娘と目され、短期間の準備でベルリン女子社会事業学校開設（1908年10月）にこぎつけるまでの時期を扱う。

初期著作の執筆動機を知るためには、1898年11月８日付けのザロモンの手紙が重要になる[4]。著作ではその直後に書く1899年小論と、最初の単著（1902年）が主たる分析対象になる。ベルリン女子社会事業学校がスムーズに開設できたのも、翌年のICWで異例の抜擢を受けるのも、初期著作によってBDF社会政策の第一人者になるだろうとの期待が後押しをしたと考えられるからだ。

本稿での検討を初期著作に限定するのは、ザロモンの個人事情を斟酌したからでもある。ベルリン女子社会事業学校開設以降、ザロモンはBDF主導権争いをしだいに醒めた眼で見ていく。有能さは際立つだけに、妬みも受ける。第一次世界大戦勃発時には親英派と非難され、ユダヤ人の故にBDF会長候補を断念させられ、ついに1919年BDFからの脱会を決意する。BDF擁護のためのフェミ

ニズム論執筆に力を注ぐことも、1908年を境に減少していく。

つまり前半生に依頼原稿としてフェミニズム論を果敢に執筆し、後半生はもっぱら社会事業・教育論の主要著作に力を注ぐ。最晩年になって再びフェミニストたる気概に立ち戻る自叙伝を構想する（Salomon[1983]; Salomon[2004]; Salomon[2008]）。これが彼女の長期にわたる著作活動の大まかな特徴になろう。

なお本稿は『人文報告』に近年掲載した拙稿の続編に該当する（岡田[2009]; 岡田[2010]）。煩雑さを避けるために、人名、BDF・ICW・グループ等の組織名で定着している事項は、原則として邦訳・略称を使用する。

Ⅱ．ザロモン初期著作分析——1899年と1902年の著作を中心として

Ⅱ－1．1896年から開始される著作活動——概観

ザロモンの初の原稿は1896年。『女性（Die Frau）』に掲載する。乳幼児・児童のモデル施設紹介を兼ねて、女性労働者家族の生活実態を描く（Salomon [1896]179）。すでに女性労働者の家庭訪問を定期的に行い、イギリス社会事業の研修旅行もグループでしているから、貧困児童問題を複眼的に捉え、児童虐待への対処として乳児院・児童施設増設にも言及する。抽象的な理念を掲げる筆致ではない。これはその後の半世紀に及ぶザロモンの執筆スタイルである。

が、そこから3年余り彼女は何も書かない。まだ修行中の身と悟っていたようだ。師シュヴェーリンの助言もあり、社会科学的な思考訓練に励む。とりわけイギリスの社会派文学作品に親しみ、自由を重んじつつ個と社会の関係性を考える姿勢に多くを学ぶ。国内ではH.ランゲ（Lange, Helene）や、E.グナウク-キューン（Gnauck-Kühne, Elisabeth）の著作を読む。

1896年から次の論稿までの三年余りに及ぶ空白。独自の課題を見つめ、習作を重ね、執筆の好機を待つ修行期間とみなしてよい。

満を持して、『新航路（Neue Bahnen）』1899年6月に、「社会事業と女性運動（Soziale Hilfsarbeit und Frauenbewegung）」を出す[5]。これは1990年代のザロモン文書館関係者による収集作業では未発見であった論稿で、BDF路線が固まらな

い時期に書かれたもの。この二番目の論稿に、フェミニズム論と社会事業・教育論とを連結させたいザロモンの意向が強く出て来る。小論ではあるが、初期の代表作に位置づけられる。『新航路』は全ドイツ女性協会（Allgemeiner Deutscher Frauenvrein, ADF：1865-1933）機関誌で、巻頭掲載であるから、女性高等教育運動に社会政策を取り込みたいランゲ等の古参フェミニストの推薦と考えていいだろう[6]。

英語講演・執筆も1899年に始める。BDF作業部会でザロモンは女性労働者の社会政策をシュヴェーリンの下で担当するから、BDF上部団体のICWでも母性保護立法と女性労働者に関する報告をする（Salomon[1900]）。後にまず社会政策通フェミニストとして国際舞台に出ていく下地もこの時期から形成されていく。

Ⅱ－2. 手紙（1898年11月8日付け）に見るザロモンの素顔

1）1898年10月ハンブルク総会

ザロモンが若手有望株として注目されるのは、1898年10月2日から開催されるBDFハンブルク総会においてである（Die dritte Generalversammlung des Bundes deutscher Frauenvereinevom 2.bis 6.Okt.in Hamburg[1898a]209）。女性労働者問題に関しては、C.ツェトキン（Zetkin, Clara）と似た見解の持ち主とADFで見なされていたJ.シュヴェーリン（Schwerin, Jeannette）の急病で（Die dritte Generalversammlung des Bundes deutscher Frauenvereinevom 2.bis 6.Okt.in Hamburg [1898a]217）、代理出席してベルリンの現状報告をするザロモンに（Die dritte Generalversammlung des Bundes deutscher Frauenvereine[1898b]224）、一部ラディカル派がBDF離脱を画策しているから宥めてくれとの依頼が舞い込む。離反を仕掛ける筆頭にあるカウアー一派とグループで共に活動をしてきた経験のあるザロモンは、調停に適任と思われたのであろう。

対立は女性高等教育をめぐる方針の食い違いにあった。ギムナジウムへの女性進学の目鼻がつく時期で、さらに平等の教育を求めるか（Verein Frauenbildung- Frauenstudium, Abteilung Berlin[1898;1899]）、妥協するかで、ラディカル・フェミニストの面々との対立が始まっていた。事態収束のためにザロ

モンも急遽を話し合いに加わる。結果、ハンブルクではBDFからの離反は食い止められる（Die dritte Generalversammlung des Bundes deutscher Frauenvereine [1898b]）。

以来、「架橋の役を任じる」が自叙伝類で彼女が描く自己像の十八番になる。架橋の役に長けた面はある。が、生涯を通観すれば期待に応えて装ったが、実像に近い。とはいえ、若いのに対立諸派の架橋の役をよくぞしてくれたと、ハンブルクでは評価される。むろん禍根は残る。この時を境にザロモンは、ボランティア・グループ創設時の貢献者たるカウアーおよびその一派とは完全に縁を切り、その分、BDF主流派に常に身を置くようになる。

次に1898年秋のこの総会の背景を、子供の頃にお転婆と言われたザロモンの素顔が如実に分かる手紙で補足してみよう。

2）1898年11月の手紙に見るBDF路線と分派活動との対立

ハンブルク総会終了後、ザロモンはBDFから依頼や相談の手紙を受け取るようだ。それへの回答の一つが、1898年11月 8 日付けの長文の手紙である（Alice Salomon, Brief an Rosalie Teblee, 08.11.1898）。この目上の女友人R.テブリィ（Teblee, Rosalie）と交す手紙の背後には、前述の女性高等教育指針をめぐるベルリン支部女性教育協会-女性高等教育（Verein Frauenbildung-Frauenstudium）のBDF離反の動きがあった。ハンブルク総会直後の10月8日、ベルリン支部はBDFからの離脱決議を断行（Verein Frauenbildung-Frauenstudium, Abteilung Berlin [1898]233）、大学進学は数ヵ年以内に実現可能との予見ができる時期で、平等を一層貫徹させたいいわゆるラディカル派と、女性の本質を掲げて自治体での雇用開拓を企図するランゲ周辺の主流派との対立が始まる（Die dritte Generalversammlung des Bundes deutscher Frauenvereine[1898b]221-222,225-226）。結果だけ見れば、ベルリン支部の主要メンバーは離反し（Verein Frauenbildung-Frauenstudium, Abteilung Berlin[1899]8-9）、1899年に進歩的女性協会連合（Verband Fortschrittlicher Frauenvereine）が結成される[7]。

総会直後に再燃する動きをザロモンは察知していたことが手紙から読み取れる。ならば、勢いにまかせて書く手紙は若気の至りではない。BDF乗っ取りも

視野に入れる分派活動に怒りが収まらないのは当然で、年輩フェミニストを追っ払いを平気で綴る。闘いに挑む若武者そのもの。1920年代、学生達が時にカトリックのシスターみたいと揶揄する、威厳ある落ち着いたイメージからは程遠い。

ハンブルク総会で双方の架橋となった「私は流行の人なの」と自負し（Alice Salomon,Brief an Rosalie Teblee,08.11.1898）、寄せられる期待には応えたいと記す。同時に、離脱者を押さえ込む戦略を披露する。若干26歳！にもかかわらず、丁寧な言い回しながら、先輩筋に当たるカウアー一派の弱点を知り尽くしているから、「待てば回路の日和あり」式に自滅を待てと知恵を授ける。A.アウグスプルク（Augspurg, Anita）はもとより、まだそう目立たないはずのH.シュテッカー（Stöcker, Helene）にも、手強い女と感じたのか敵愾心を燃やす。同時に遠慮深さも装う。「皆様方が、私をそのように思われるならば、そうなのでございましょう」と（Alice Salomon,Brief an Rosalie Teblee,08.11.1898）。他者の評価を自己像にする図太さもあるザロモン。心を許す目上の女友人に、上昇志向で、闘争的な素顔を曝け出している。

また奇妙なことに、長い手紙のどこにも師シュヴェーリンの名前は出ない[8]。直前までシュヴェーリンが講演する予定であったハンブルク総会。代理出席をしただけなのに、シュヴェーリンの地位にあるかの如く口出しする。誰を、どうすれば追い落とせるかの戦略を、丁寧な言葉遣いではあるが披露する。対外的にはBDF派閥争いはまだ表面化していない。いわゆるラディカル派やリベラル派も、BDFに結集するメリットを知っていたし、数多の古参フェミニストがBDFを牛耳る時期でもある。

ボランティア・グループ創設にシュヴェーリンと相並ぶリーダーとして携わり、ザロモンのおずおずした当初の活動ぶりを見聞するM. カウアー（Cauer, Minna）にすれば、グループを私物化したがるだけでなく、BDF内紛にも口出しする後輩の振る舞いには、心穏やかではなかったのではないか[9]。

Ⅱ－3. 二つの初期著作（1899年と1902年）の類似点と違い

ザロモン初期著作には、先の手紙でザロモンも吐露するBDFのお家事情が絡

む。この視点から次に二つの著作を分析してみよう。

1）1899年小論「社会事業と女性運動」

初期著作では1899年小論「社会事業と女性運動（Soziale Hilfsarbeit und Frauenbewegung）」に注目すべきだろう。1990年代のドイツでの著作収集作業では発見されなかった[10]。BDF路線が流動的な時期に書くだけに、BDFの「母性」言説といかなる関係を持つのか、BDFから距離を置きながら社会政策通フェミニストとして活躍できたのはなぜか等々の検討が可能で、同時に現在フェミニズム論の到達地平から遡及できる素材も提供してくれる。また1896年ロンドン滞在で学ぶイギリス社会事業の影響も散見されるので、後年のザロモン社会事業・教育論の問題意識もある程度は読み取れる。内容分析に関する報告は別途予定しているので[11]、以下では概要紹介に留める。

これは社会政策推進をフェミニズム運動の新戦略として提起するもの。先の手紙との関連で読むと、「書きたいこと/書きたくないこと」も自ずと浮上する。ザロモンはラディカル派が掲げる抽象的な平等を掲げる女性高等教育には一切ふれない。逆に家庭訪問で熟知している女性労働者の生活困難を緩和する社会政策をフェミニズム論と結び付ける。そのためにB.ポッター（Potter, Beatrice）の調査法に早くも注目する（Salomon[1899a]125）[12]。1896年ロンドンでザロモンがセツルメントや各種社会事業関連の資料を集め、社会科学文献を読み漁ったことが小論にも反映している。師シュヴェーリン共々、イギリス社会事業の勃興期の動きに注目しつつ、BDFの女性労働者問題の作業部会を立ち上げ、ベルリンで女性労働者ホームの運営にも携わる体験が行間に埋め込まれている。

ちなみに、社会政策を志向するザロモンが当初依拠するのは、1899年論稿を見る限りでは上述のポッター、即ちウェッヴ夫妻である。1899年時点では憧れにも似た感情を持つ。ザロモンは親英派で、イギリス社会事業が社会調査を軸に科学的手法を重んじることを理解していた。だから1902年から大学での研鑽でも、統計調査分析に熱意を注ぐのは当然の帰結なのかもしれない。

なお厳しく査定すれば1899年小論も寄せ集めで、女性問題と社会問題の構造

的連関を知る上で、多くを学んだはずのグナウク-キューンの名は出てこない。ランゲやシュヴェーリンの著作も含めて読了直後は感銘を受けるが、長くは続かない。書きなぐりのフェミニズム論にすぎないと見破ったのだろうか。唯一の例外はイギリスの貧困研究・調査法であるようだ。若さの驕りもあるのだが、先輩諸氏を差し置いて有能さに目覚めていく時期なのだろう。

2）転機となる1899年秋までのザロモンの対処

さて小論は6月刊行であり、翌月にシュヴェーリンが急逝する。おりしも秋からグループは1年制社会事業教育コースを発足することになっていた。急遽、それを率いる長を決めざるを得なくなり、結果的にザロモンが選出される。

1899年にグループの長に就任することは、ザロモンの人生の大転機になる。その後にBDFでも、ICWでも、国際ソーシャルワーク教育界でも、異例の抜擢が続く起点に、このグループの長就任があるからだ。だからグループ創設20年周年記念冊子にも師に献辞を捧げる（Salomon[1913]）。シュヴェーリンの引き立てなくして、またその夭逝なくして、グループを率いることは難しかったはずだ。なのに、1898年11月手紙にシュヴェーリンの名はない。以後も、師を語る場では演出があるように感じる。

例えば、シュヴェーリンの偲ぶ会でのザロモンが読む追悼の辞は、ランゲとシュヴェーリンとの結びつきを奇異なほどに強調する（Salomon[1899b]113）。後ろ盾を失ったザロモンの計算が早くも読み取れる[13]。シュヴェーリンとランゲはBDFで一緒に仕事をする若き日の仲間。しかし、シュヴェーリン結婚後の交流はさほどない。が、追悼の辞を聞く限りは、ザロモンが後継者なのだから、それならばランゲとも距離が近いのだろうと、参列者は思うだろう。それが27歳で自然体でできる点には舌を巻く。1898年手紙で見せる才覚は、追悼の式典でも発揮される。彼女が要所要所で目上の引き立てを受けるだけのことはある。「私は流行の人」と1898年手紙で自負し、周りも能力を認める。床に臥すことが多い師から学ぶことはもうなく、死後は思い出すことも稀であったのではないか。

以上、1898年手紙に名がない点と、次に述べる1902年の最初の単著への自己

批判（Salomon[1928]17;Ausgew.Schr., Bd.3[2004]392）から、シュヴェーリンの影響力は若き日にザロモンが語る程のものではなかったと推察される[14]。

3）1902年の最初の単著『女性の社会的責務（Soziale Frauenpflichten）』をめぐって

若きザロモンが先輩諸氏の見解を「糊と鋏で切り貼り」をして、最初の単著として刊行するのは1902年。講演や書きなぐった草稿の寄せ集めに近いのだが（Salomon[1902a]5）、当初は嬉かったようだ。自叙伝では母の反応を例に挙げて、初々しく回想する。

「今だってよく覚えているわよ。ある朝、封筒から出した一枚の金貨が、食卓の上で輝いていた光景を。私が稼いだ最初の報酬だったの。母の驚きようったら。一族から嘲笑され、排撃されている考えを、誰かは知らぬが金を払ってまで買う他者がいるなんてびっくりしたみたい。ちょっとだけ私のことを認めたみたいよ。母を取り巻く一族の伝統にはユダヤ商人らしく何でもお金で他者の成功を測定する価値観が濃厚だったの」とユーモラスに後に自叙伝では語る（Salomon[1928]17; Ausgew.Schr., Bd.3[2004]392）

なにやかんやと言っても仲の良い母娘であった。ザロモンは母との同居を続ける。依存的で、愚痴っぽく、しかし娘の成功を喜ぶ平凡な母。ザロモンは甥や姪との付き合いも頻繁で、時に仕事を早く切り上げて、母の世話や親族の雑事に付き合う。だからベルリンで多様な愛の形を堂々と実践するフェミニスト仲間からは、何と陳腐な生き方と小馬鹿にされていたようだ。

4）「糊と鋏の切り貼り」著作の自己批判から博士論文への準備

1902年単著は、若い女性向けのアジ・ビラといえる（Salomon[1902a]5-7）。グループのボランティア活動に参加させる狙いがあるから、響きのよい「母性」言説を散りばめながら（Salomon[1902a]17,24）、女性の低賃金問題に言及し、その社会政策が市民女性の責務なのだとアジる（Salomon[1902a]108-109）。草創期グループが、二種類の「呼びかけ」文書の二枚舌戦略で若い女性を集める手法に、ザロモンは多くを学ぶだけに、エッセイ風著述で若い人を勧誘できれば当

初はよしとしたのかもしれない。お金も稼げ、名前も売れるならと、その時は思ったようだ。が、賢明にもほどなく、「糊と鋏の切り貼り」の「編纂風」の安易な書き方を自己制御する[15]。

1902年暮れ、パーティで社会政策学会の研究者から大学演習への参加を勧誘され、先に博士号を取得する友人にも触発され、大学に通い始める(Salomon[1983]62-63)。他にもグループの活動に疲れを覚えたとか、ランゲ-ボイマー派の権力欲の凄まじさに呆れ果てたとか、失恋したらしいとか、大学で学ぶ理由が自叙伝から推測できる。が、初期著作を自己批判する醒めた眼が最大の動機になっていたと、今は思う。むろん、1896年にロンドンで見聞する苦汗労働、シュヴェーリン自宅のある労働者居住区での家庭訪問、女性労働者ホームの運営等々で磨かれた問題意識が、博士論文の「同一価値労働・同一賃金」に直結するのだが。

単著刊行と同じ年の9月に『女性』に、ザロモンは母性保険の問題点を公表する(Salomon[1902b])。後の自叙伝では、このテーマこそがオリジナルな発想に基づくものと語る。ここよりその政策課題を国民経済学から解明すべく大学に通い始め、1906年まで博士論文の執筆に専念していく。

Ⅲ. 社会政策通フェミニストへの道筋——1902年～1908年

かくしてグループの活動を抑え、大学での研究に集中する。30歳台前半は真剣に学ぶには最も適した時期で、1906年に博士論文を提出する(Salomon[1906])。後の自叙伝ではフェミニズムの視点でそれを書いたと告白(Salomon[1983]64)、この間に鍛え抜かれた能力の伸びは目覚ましく、ザロモンは社会政策通フェミニストとして、まずBDFで、次いでICWで名を馳せていく[16]。

ただし博士号取得後も、すぐには執筆姿勢は改まらない。1908年にベルリン女子社会事業学校開設にこぎつけ、1913年に自前の校舎建設を決断するまでは(Salomon[1983]105)、執筆に関してはなお揺らぎの中にある。国内活動では社会事業教育で生きると決めるのは、第一次世界大戦からである。ザロモンの座右の銘にして、ベルリン女子社会事業学校開校式でも繰り返されるT.カーライ

ル（Carlyle, Thomas）の言葉「汝の仕事（アルバイト）をみつけし人は幸せだ」は、ようやくBDF脱会後に身に付くようだ[17]。が、それでも1908年は執筆活動では大きな転機になる。

以下では同年の3つの著作から、博士号取得後の能力と心情を探ってみたい。これは初期著作の最後に該当する。

Ⅲ－1. 社会政策通フェミニストとしてのデビューと転機になる1908年

1)「母性」言説の国ドイツを意識するザロモン①――1908年講演

1908年10月にベルリン女子社会事業学校をザロモンは開校するが、それに先立つ同年9月にハノーファーで開催されるドイツ救貧・福祉事業協会（Deutscher Verein für Armenpflege und Wohltätigkeit, DV；以下、ドイツ協会と記す）の総会講演者になる。これはドイツ語圏社会事業界に女子社会事業学校を売り込む追い風にもなる[18]。

ドイツ協会総会でのザロモン講演「母性保護と母性保険」は、女性講演者としては1905年M.バウム（Baum, Marie）に次ぐ2番目、提言主旨を付加する形は女性では初めてである（Ausgew.Schr., Bd.1[1997]604）。誰が女性向けの社会政策・社会事業政策の専門家なのかが、披露されたと言える。同年、『母性保護と母性保険（Mutterschutz und Mutterschaftsversicherung）』として刊行、社会政策通としての名声が国内外に広まっていく[19]。

ともあれ男性がお膳だてする舞台で、「社会保険制度を骨子にする母性保険を！　補充的役割として公私社会事業の母性保護政策を！」とザロモンは提言をする。すでに前世紀末からL.ブラウン（Braun, Lily）他の著名フェミニストも似た内容を、メディアも巻き込んで展開していた。にもかかわらず、総会講演が「大成功」するのは、言説戦略の効果による。シュテッカーの「自由恋愛」「未婚の母」へのアンチ・テーゼは万人受けする内容だし、ドイツ協会もだから女性を壇上に登用する。ザロモンとドイツ協会の双方の思惑が、1908年総会では合致したのである。

むろん、統計資料を駆使して説得力を持たせ、それをテコに実現可能なプログラムに的を絞り、母性保険－母性保護を連結して政策提言の手順を具体的に

示す点は、ザロモンの功績と評価できる。また救貧事業対象に陥りやすい女性を社会事業制度に組み込み、公的社会事業と教会・民間機関の協働を提言し、相談業務・施設整備も趣旨に盛り込む。具体的で、制度改革の見通しが持てる提言に、ザロモンの独自性が光る（Salomon[1908b]89-91）。

2)「母性」言説の国ドイツを意識するザロモン②——女子社会事業学校テキスト

1908年にはもう一つ単著を刊行する。ベルリン女子社会事業学校開校に間に合わせるべく編む『社会事業・女性教育（Soziale Frauenbildung）』のテキストである[20]。ここで興味深い文をザロモンはテキストの締め括りに出す。

「ドイツほど女性だからできることを、"母の本能"を、"女性の課題"を、"女性の欲求"を、こんなにも出す国はない（Nirgends wird soviel wie in Deutschland von der Eigenart der Frau,von ihren "mütterlichen Instinkten", von "weiblichen Aufgaben" und "weiblichen Bedürfnissen"）」と記す（Salomon[1908a]83）。この文面のすぐ後に続くのがO.オルベルク（Olberg, Oda）のフェミニズム論の紹介で（Salomon[1908a]83-84）、さらに註で1908年開校の背景にも言及する（Salomon[1908a]84）。ペスタロッチ・フレーベル館の提携申し入れに感謝の意を表するのだが、「精神的母性」標榜の牙城たる同館向けの言葉遣いはない。しかも「女性の文化的使命」として抽象的に語るのではなく、女性が社会教育・社会事業教育に参入することを正当化するために「女性だからできること」を提唱する。男女同権と女性の本質とが入り混じる。

実は先の『母性保護と母性保険』にも似た文がある。

「母性（Mutterschaft）を理論上、これ程に称揚する国は世界のどこにもない。ドイツほど母性の聖性が賞賛され、女性に"自然の課題"があることを指摘する国はない（In keinem Lande der Welt hat man in der Theorie die Mutterschaft so verherrlicht, hat man ihre Heiligkeit so gepriesen, hat man die Frauen so nachdrücklicht auf ihre "natürlichen Aufgaben" hingewiesen wie in Deutschland.）」（Salomon [1908b]47）と。ここでもドイツが「母性」言説の国だと明快なまでの指摘をする。その筆致には、賛同も、反対もない。現実がそうなのだから、そこをふま

えてとでも言いたげなのだ。

二つ著作の文章を比較してみると、女性の本質を説くドイツで多用される言葉には共に括弧を付けている。本稿の下線の箇所である。が、1908年テキストの方の「女性だからできること（Eigenart der Frau）」には括弧はない。これは1899年小論で用いるザロモンのお気に入りの言葉である（Salomon[1899]123）。だが、他者が多用したがる女性の本質を説くような常套文句には、全て括弧を付ける[21]。

ここより彼女の怒りの声が聞こえてくるような気がする。「ドイツ社会ってのは、ドイツ男性の支配欲ってのは、本当にどうしようもないわ」と。その困難な現状を女子学生に暗示しながら、だからこそ「女性だからできること」を武器に、「職業自立の最善の方途になりうる女子社会事業学校に結集せよ」と呼びかける。1908年テキストの主旨をこのように解してほぼ問題はなかろう。

3)「母性」言説の国ドイツを意識するザロモン③――「女性運動の理論の発展」論稿に見る書評のポリティクス

博士号取得直後の頭脳が冴えわたる時期だからか、1908年には矢継ぎ早に大部な論稿を刊行する。「女性運動の理論の発展: 女性問題に関する文献（Die Entwicklung der Theorie der Frauenbewegung: Literatur zur Frauenfrage）」と題する研究時評もそうだ。このザロモン・フェミニズム論では秀逸と評される論稿もかなり長いので、ここでは一端を見るに留める。

これはBDF穏健派の理論装備の研究時評の性格を持つ。巻頭に17冊13名の著者文献リストを出す（Salomon[1908c]451-452）。当時、入手可能なフェミニズム論・女性論の主要なものを列挙し、各論者の説を淡々と紹介する。

時評の場合は傍観者的解説も多くなるのだが、この論稿ではBDFの現状分析から問題の本質に迫るとの意志が明確で、一乃至二冊程度の書評では生じにくい宣伝効果も狙ったと思う。BDFはもとより、女子社会事業学校やグループの学習教材にも用いて、誰の著作がいいのかを売り込む思惑もある。書評のポリティクスの典型で、G.ボイマー（Bäumer, Gertrud）とマリアンヌ・ヴェーバー（Weber, Marianne）の両名を一括りにして、BDF穏健派の結束を図る。つまり

1908年当時のBDFの内情をふまえて、会長筆頭候補ボイマーと、著名な夫を持つマリアンヌを持ち上げ、「二番手に私は徹するわ」式の筆致が目に付く。後年、マリアンヌも会長候補選出を前提に、1914年と1919年にBDF擁護の著作を出す。

ペンこそが武器と自覚する博士号取得者のフェミニストの技。やや姑息な執筆動機なのだが、1898年手紙で吐露するように、何事に対しても架橋の役を任じるだけに、行間の奥に潜むザロモンの真意も汲み取るべきだろう。正統派フェミニズム論にも言及し、オルベルクとR.メイレーダー（Mayreder, Rosa）に敬意を表するからだ。

ザロモンがここで扱うBDF関係者以外の主要フェミニズム論は、次の４名である。Ch.ギルマン（Gilman, Charlotte Perkins）の『女性と経済（Women and Economics）』（1899）で、刊行時点はCharlotte Perkins Stetson名。独訳はBDF会長M.ストリット（Stritt, Marie）による『男と女（Mann und Frau）』（1901）で、ザロモンも訳業に参加。さらにブラウンの『女性問題　その歴史的発展と経済的側面（Die Frauenfrage, ihre geschichtliche Entwicklung und ihre wirtschaftliche Seite）』（1901）、オルベルクの『女と知性（Das Weib und der Intellektualismus）』（1902）、メイレーダーの『女性性の批判について（Zur Kritik der Weiblichkeit）』（1907）である。長年来の論敵である社会主義者ブラウンと、信頼されていたストリット会長の依頼で手伝うギルマンの論は、通例の紹介に徹する。対照的にオルベルクとメイレーダーは、一見、淡々とした紹介なのだが、社会民主党員オルベルクへの親近感は否めないし（Salomon[1908c]470-473）、メイレーダー・フェミニズム論の水準の高さも看破する（Salomon [1908c]498）。

要するに、BDF擁護の時評とはいえ、研究倫理を放棄する愚かさはザロモンにはない。これが長期にわたる執筆活動を支える原動力になる。ともあれ、1920年代は社会事業・教育論に集中する。編著の類は福祉職国家（州）試験に関わる社会事業概論のテキストに限定される。出題範囲が多岐にわたるから数名で書く判断は正しい。改訂版の頁割り当てでも公正さは担保され、苦手な分野は若手に執筆を託し、自分は脇役に回る（例えば、Salomon [1909]の改訂等）。この辺りは、若き日にベルリンの社会政策研究者集団に見込まれ、フンボルト大学で国民経済学の博士号取得をするだけのことはある。同時期に博士号を取

得する著名フェミニストの中では、ザロモンは最もアカデミズムに近く、晩年まで著述に励む数少ない女性であった。

Ⅲ－2.「母性」言説へのザロモンの位置――1908年著作に共通する本音から

上掲の3冊は、学校設立の機運が出て来る1907年と、1908年秋のベルリン女子社会事業学校開設準備の時期にまとめたものである。この背景をふまえると、3冊に共通する本音も拾い出せる。当時の彼女の心境を自叙伝他の著作分析をふまえて評伝風に綴ってみると、以下のようになろう。

「1900年頃から私はあの“おとこ女”のランゲさんの意を汲んできたわ。今だってそうよ。ランゲーボイマーのカップルときたら、フェミニン系権力の権化みたいなもの。その周到な足引きときたら。だから芸術家肌のストリット会長は最近はドレスデンからベルリンに来たがらないのよ。一種の院政でもいいよ、ボイマーさんを会長にしたかったらどうぞの心境かもね。ランゲさんの前では一歩下がってのいい子を演じるのに、目立つ席には真っ先に座らないと気のすまないボイマーさん。世襲制に近い権力にはほとほと手を焼くわ。けれども、ボイマーも可哀そう。博士号取得しても定職に就けないんだもの。高学歴の女がドイツ社会で職業自立するのは並大抵ではないわ。だからグループの1年制コースを2年制社会事業学校にするには、このカップルにも支援をしてもらわないと。むろんBDFメンバーにも協力してもらわないとね。男が支配する宗派系学校に対抗して、女子社会事業学校を軌道に乗せるのは大変だろうから、それに先立ってボイマー著作を褒めちぎっておかないと。マリアンヌの著作と一括してね。彼女らの母性解釈の食い違いはこの際、無視よ。本当はオダベルクのフェミニズム論が私好み。メイレーダー論稿もさすがだわ。でも、二人はよそ者。BDFのための御用理論固めには、ボイマーとマリアンヌの論稿を一枚岩的に見せる書評が、ピタリかも。書評のポリティクスって、まさにこれねぇ。これって学問じゃないんだけれど、まあ、私の書くフェミニズム論稿は1902年の最初の単著がそうなんだけれど、編纂風の切り貼り・寄せ集めレベルでいいんだと、割り切りましょう。ベルリン女子社会事業学校こそ、私が育てたい我

が子なんだから」が、本音だろう。

ちなみにザロモンは、翌1909年にICWの招聘で北米を旅し、「羨ましいわ。北米に生まれたかった」を連発する。ザロモンの眼には、北米女性が生き生きと自由に活動していると映る（Salomon[2004]88）。シカゴではもっとビックリする。男に気兼ねなんかせずに、ドンドン仕事を進めているように見えた。J.アダムズとその仲間のエネルギッシュさ。シカゴ大学社会学研究者と堂々と渡り合える学習会や講義がセツルメントにある等々。グループでもそうした方向を目ざしたかったザロモン。この北米訪問を境に、ドイツ福祉職像を1920年代、「女のアメリカよ」と標榜したがる。むろん当時の北米女性がザロモン達よりも解放されていたのかの査定は難しい。ザロモンが北米で出会う女性は恵まれた人々が大半なのだから。

Ⅳ．ザロモン初期著作の研究史的位置づけ——その到達点と課題

以上、グループの二種類の「呼びかけ」と（岡田[2009]）、ザロモン研究の批判的検討をふまえて（岡田[2010]）、本稿でも引き続き現代フェミニズム論の知見に即して、フェミニストたるザロモンの社会政策・社会事業教育への道筋を明らかにしつつ、初期著作の研究史的位置づけを行った。

Ⅳ－1．ザロモンの真意を読み解くことが重要

まず再度、ザロモンの内面に寄り添って、「母性」言説を書き込んでしまう心情を評伝風にまとめておこう。

「世界中のどの国だってドイツ程も母性（Mutterschaft）を理論上、褒めちぎらないわ」「褒めそやす風潮はうんざりよ。こんな国でようやく女性労働者の母性保険・母性保護の実現可能なプログラム提出ができる機会が訪れたのだから、そこそこの妥協は致し方ないわ」となろう。この辺りの「母性」言説の読みかえとBDF内外で見せる処世術は、名うての実務派フェミニストたるザロモンの

真骨頂だろう。

ザロモン初期著作は、「母性」言説の肯定でも、否定でもない。政策提言の実現可能性を斟酌する文面であり、淡々とドイツ協会では政策綱領を出し、女子社会事業学校では職業自立を力説するテキストを用いる。真意は行間にこそある。何を到達点と定め、「母性」言説の国と記すのかの背景を読み取るべきだろう。

真正面から男性に闘いが挑みにくい状況下にあって、フェミニストたる女のジレンマは大きい。譲歩を重ね、果実を得るしかない。専門社会事業教育や福祉職資格の活用も、BDFの女性公務員の雇用拡充戦略の中に位置づけるしかない。

が、その生涯を通観すると、重要局面で自己決定を迫られるや、フェミニストたる生き方へと回帰する。1933年ナチ政権によって、アイデンティティをそのつど確認できたベルリン女子社会事業学校への入校を禁じられる。さらに1937年、財産を剥奪され、合衆国に亡命する。既存の価値からの離脱と、自己像を修正せざるをえない事態に、還暦を過ぎて投げ込まれる。加齢に伴う身体の変化。生身の自分と向き合う日々。揺らぎの中にあったアイデンティティは、若き日に培われたフェミニストたる気概へと向く。それが最晩年に自叙伝刊行を夢見て書きためていたどの原稿にも出て来る（Salomon[1983]; Salomon[2004]; Salomon[2008]）。

つまり、フェミニストとしてのザロモン査定が、手強い課題であるのは、従来の研究が自叙伝·伝記類の信憑性に疑義を挟まず、他者の視点を混在させるザロモンの執筆姿勢を見逃してきた点に、つきる。「母性」言説を隠れ蓑に、他者に見せたい像を打ち出すザロモン。ボイマーのような剥き出しの権力欲はないが、さりとて無欲でもない。1898年秋に注目を浴び、翌々年にBDF理事に抜擢され、さらにベルリン女子社会事業学校開設に至るまでの立場はまだまだ弱い。先輩・同輩に気遣いをし、実務能力を売り込み、人の嫌がるBDF事務局の雑事を一手に引き受ける。1919年になってBDF脱会の決断に至るのは、ここから自身を解き放つためであったように思われる。

Ⅳ－2. ザロモン初期著作のフェミニズム論の特徴

要するに、ザロモンの虚像のベールを剥ぐ鍵も、実像に迫る秘訣も、そのフェミニズム論にあることは確かで、BDFの組織戦略が渦巻く時期に書かれたザロモン著作を読み解くにはコツがいる。初期著作のフェミニズム論は恣意性に満ちている。社会事業・教育論はまだましなのだが、それでもBDFと絡む論稿ではポリティクスが散見される。

これは1920年代、BDF脱会後も続く。例えば最初の自叙伝に再三再四で登場するのが、控えめに振舞う若き日の自己像だ。他所から降って沸いたように推挙されグループの長を引き受け、大学で博士号取得なんて考えてもいなかったのにと綴る（Salomon[1928]）。シュヴェーリンが亡くなる前年秋の1898年手紙では、ラディカル・フェミニストの面々への断固たる姿勢と、野心に溢れる陳述が並ぶ。にもかかわらず、自叙伝では謙虚が全面に出る。本音と建前を使い分ける手法は、自叙伝ではかなりあると言わざるを得ない。グループ創設の貢献者カウアーのみならず、目立つフェミニストに闘争心を燃やす。若干26歳！誰からも注目される「私は流行の人なの」と目上の友にも語る。謙虚さからは程遠い性格なのだ。むろんだからこそ、ザロモンは翌年、BDF理事に抜擢されるのだが……。

1898年頃のザロモンは、お転婆であった幼少期とも、鬱々と日々を過ごす思春期とも、もはや違う。BDFの行方を冷徹に見極める眼がある。講演のレトリックや（Salomon[1983]57）、架橋の役は師シュヴェーリンやそこに集う研究者の直伝であるが、手紙を読む限りではもはやシュヴェーリンの代行の域を超える。自分の判断で動き、能力に自信を持ち始めていた。グループで活動する数ヵ年で、天賦の才と言える実務能力を磨き、現場調査と事例検討の情報収集をする。まさに「水を得た魚」であったに違いない。

ザロモンの執筆活動から見えてきたことは、前世紀転換期のBDFがラディカルさを内包しつつ、それを「母性」言説を駆使して内と外から一枚岩的に演出する戦略に、ザロモンが初期著作を通して仕切る役目を果たす点だ。意図した面と、乗せられた面がある。金や地位には無欲な部類に属する。むろんボイマ

ーだって、ザロモンのように学校経営で自活できるならば、権力欲を自制したであろう。

揺れるアイデンティティ、変化するアイデンティティ。自立したいフェミニストたる自覚も、そう見られたい他者向けの演出を故に、時に後退する。ザロモンの生きた時代も、現在も、これは似ている。それだけにこの女の内面に立ち入り、活動動機を探るには積み残された課題はなお多い。継続課題としたい[22]。

（注）

1）竹村は、「『女の解放』というときの『女』の指し示すものの不安定さや、『解放』という意味の多義性や複層性」（竹村[2000]5）は初期フェミニズム段階からの争点であること、換言すれば「現在のフェミニズムに見られる複数性や対立は、現在、唐突に出現したものではなく、フェミニズムが抱える歴史的・構造的な事柄」（竹村[2000]4）であるとの指摘をする。児童の摂食障害をフロイト精神分析とフェミニズム論から理論化できる可能性を持つ研究者であったと感じる。これに関して筆者は（岡田[2010]39）、竹村著作から多くの示唆を得た。ご冥福を祈る。

2）この種の批判の反証として、第一波フェミニズム運動に関する栗原のアメリカ史研究は一読に値する（栗原[2009]）。

3）が、1920年代を通じて、ローカル・レベルではドイツ・フェミニストの多様な社会実験や試行錯誤は続く。その多くが亡命を強いられ、史資料も散逸したままで、目ぼしい研究成果はないままに今日に至る。

4）初期に限定しても多くの未見のBDF関連文書（LA Berlin所蔵, 旧H.Lange文書）がある。とりわけ手紙は重要。次期会長を狙う人物とザロモンは手を結ぶからで、公式文書とフェミニスト達の私信とのギャップに気づくことで、ザロモンの本音と建前もより明らかにされよう。これが平成23年度～27年度の学術研究助成基金助成金「ドイツ女性団体連合国際ネットワークに見るザロモン研究—ICWとICSSWの連携役」の主たる作業課題になる。

5）この時期の訳語は厳密には「社会(的)援助活動と女性運動」になるが、社会事業と記す。

6）『新航路』は、当時はA.シュミット(Schmidt, Auguste)編集。ちなみに、シュヴェーリン没後、ザロモンの寄稿先は数ヵ年、ランゲの息のかかった所に限定される。“Die Frau”と“Centralblatt des Bundes deutscher Frauenvereine”が多い。

7）草創期BDF地方支部での分派の動きに関する研究は、管見の限りではない。平等重視の一群と、女性の本質を重視する多数派との対立が生じてはいるが、ザロモンの手紙でも分かるようにBDFへの大同団結が先決とされる時期であった。

8) 師はハンブルク総会以降に、BDFで主流派固めの戦略を練るザロモンと話し合ったのだろうか。

9) グループに関するザロモンの語り口は実に勇ましい。1910年開催のハイデルベルク会議のグループ中間報告では初期リーダーとしてのカウアーの名前をあげ(Salomon[1912]5)、宗派を超える全国網を目ざす（[1912]32-39)。が、1913年刊行の20周年冊子では創設事情の詳述は避ける。カウアー没後に執筆する最初の自叙伝で、初めてカウアーについて語る。「この際にはっきり言っておきます」「私がグループを設立したのではない」と(Salomon[1928]389)。なおこの重要箇所を筆者は2009年当時、「私がグループを設立した」と誤訳し(岡田[2009]12)、2011年春に自身で気づく。反省すべき点で、ここで訂正する。が、いずれにせよ1898年手紙からカウアーへの複雑な思いが拭い難かったことは読み取れる。家族を相次いで亡くすカウアーは、時に仕事にのめり込む。グループ創設時がそうであった。権力欲は少なく、飽きっぽい性格であり、ザロモンとは対照的。

10) よってザロモン著作集第1巻には所収されず(Ausgew.Schr., Bd.1[1997])。

11) 2012年5月の社会事業史学会で、史資料紹介を兼ねて報告する。題目は「若き日のA.ザロモン社会事業・教育論の特徴—社会政策通フェミニストとなる契機に注目して」を予定。3ヵ年に及ぶ執筆空白期に何を学ぶのかが推測できる点が、1899年小論を取り上げる意義になる。女性労働者問題に関しては、ドイツ社会民主党や1890年代後半のイギリス社会事業に影響を受けるのに、そのザロモン研究は史資料がないためにドイツでも手つかずのまま。小論の背景と内容分析は、この欠落を補う点で貴重な素材となる。

12) 1892年に結婚するビアトリス・ウェッブ(Webb, Beatrice)を、1899年小論ではそう記す。その後に国際会議で期待を抱き接近し、母性保護政策にまだ無自覚である彼女に落胆。これもザロモン博士論文の課題に繋がっていく。

13) シュヴェーリンへの追悼文は二つある。最初が1899年8月で(Salomon[1899a]73-77)、詳細な活動紹介。二番手が1899年11月になる(Salomon[1899b]113)。ランゲ・ボイマーに与していくザロモンの内面が読める。

14) 2010年9月2日夕刻のP.ライニッケ教授（Reinicke, Peter）との2時間弱の協議で、この結論に達した。

15) 最初の単著を、「糊と鋏」で「切り貼りの寄せ集め」と自己批判する。これは最初の自叙伝で吐露される真意で、執筆時期は1926年秋であるが、気づきはもっと早かったはず。ヴァイマル期に公言するのは、若い世代の大卒フェミニストに過去のフェミニズム論稿を批判されたからという推測も成り立つ。が、ザロモンの場合は1902年暮れには気づいたと考えてよかろう。

16) 同時期の英語論稿も女性労働者問題を扱う。博士論文と主旨は同じ。仲間内ではザ

ロモンは英語が堪能と見なされていた。博士号と英語力によって、BDF社会政策を代表するとICWで認められ、1909年の抜擢に繋がっていく。例：Labour Laws for Women in Germany (= Women's Industrial News, ed. by Women's Industrial Council), London 1907, 15 S.

17）博士論文が目ざそうとする到達地平は「同一価値労働・同一賃金」である。ザロモンは社会事業という実践の学開拓に乗り出していく中で、女子社会事業学校設置運動を推進し、それでもって「同一価値労働・同一賃金」の妥協案となる女性公務員・福祉職資格化と連結させることを狙う。それしか手立てがないのが現状であった。ザロモンの社会政策提言で唯一成功したのはこれで、その評価はなお定まらない。対人援助サービスの低賃金構造が是正されないからである。

18）1919年からドイツ公私社会事業協会(Deutscher Verein für öffentliche und private Fürsorge)の名称。

19）下地は用意されている。BDF理事通信・手紙では博士号取得は快挙と見なされ、社会政策関連の仕事は、「ザロモンさんを推奨」が合言葉になっていく。政策提言を女性にさせることで、保険制度改革に参入しやすくなるとのドイツ協会の思惑もあった。ベルリン女子社会事業学校設立機運がフェミニストの連帯に依るのとは対照的で、男性主導のドイツ協会にザロモンが招聘された形であり、後のドイツ協会との確執の芽生えも感じられる。

20）「女性の社会教育」あるいは「社会的女性教育」訳になろうが、本書はザロモン社会事業・教育論の初期の代表作であり、それが分かる邦訳にした。

21）つまり両著作では、ややパターン化した執筆スタイルで「母性」関連用語を出す。おそらくは草稿完成の間際に、章冒頭や締めの箇所に「ちょこっと」加筆するのであろう。だから括弧付きになる。お転婆娘はすでに嫌というほど身内の男性と大学内で妨害を受けていた。そんな男達や、それと手を組む保守派女性をなだめるために、玉虫色の「母性」言説を駆使するのではないか。母性保険・母性保護の政策提言や、社会事業教育の要になる箇所は、むろん本音で勝負する。

22）本稿は平成23年度～27年度の学術研究助成基金助成金「ドイツ女性団体連合国際ネットワークに見るザロモン研究―ICWとICSSWの連携役」の初年度の成果である。

【史資料】

Landesarchiv Berlin (LA Berlin)

Bund Deutscher Frauenvereine

－Alice Salomon,Brief an Rosalie Teblee,08.11.1898,Landesarchiv Berlin B Rep. 235-02-01, Nr.1-3/1-3; MF-Nr. 1489-1491.

［上記手紙の背景—1898年ハンブルク総会関連文書］

Die dritte Generalversammlung des Bundes deutscher Frauenvereine vom 2.bis 6.Okt.in Hamburg(1898a) In: Neue Bahnen. Organ des Allgemeinen Deutschen Frauenvereins, 33.Jg., Nr.20, 15.Okt., 123-125.

Die dritte Generalversammlung des Bundes deutscher Frauenvereine(1898b) In: Neue Bahnen. Organ des Allgemeinen Deutschen Frauenvereins, 33.Jg., Nr.21, 1.Nov., 221-230.

Verein Frauenbildung- Frauenstudium, Abteilung Berlin(1898) In: Die Frauenbewegung. Vol.4, Nr.21,1.Nov.,233.

Verein Frauenbildung- Frauenstudium, Abteilung Berlin(1899) In: Die Frauenbewegung. Vol.5, Nr.1,1.Jan.,8-9.

【主要参考・引用文献】

1. ザロモン初期著作（下線は本稿主要著作、本稿では初期著作は1908年までとする）

Salomon, Alice(1896) Das Kaiser- und Kaiserin-Friedrich-Kinderheim in Bornstedt. In: Die Frau, 4.Jg., Nr.3, Dez., 179-182.

Salomon, Alice(1899a) Soziale Hilfsarbeit und Frauenbewegung. In: Neue Bahnen. Organ des Allgemeinen Deutschen Frauenvereins, 34.Jg., Nr.11, 1.Juni, 123-125.

Salomon, Alice(1899b) Jeannette Schwerin. In: Centralblatt des Bundes deutscher Frauenvereine, 1.Jg., Nr. 10, 15.Aug., 73-77.

Salomon, Alice(1899c) Gedächtnisfeier für Jeanette Schwerin. In: Centralblatt des Bundes deutscher Frauenvereine, 1.Jg., Nr. 15, 1.Nov.,113.

Salomon, Alice(1900) Protective Legislation in Germany. In: Women in Industrial Life. The Transactions of the Industrial and Legislative Section of the International Congress of Women, (= The International Council of Women, Report of the Transactions of Second Quinquennial Meeting Held in London July 1899. Edited by the Countess of Aberdeen, Bd. 6), London 1900, 36-40.

Salomon, Alice(1901) Die Frau in der sozialen Hilfsthätigkeit. In: Lange, Helne u.Bäumer, Gertrud(Hg.) Handbuch der Frauenbewegung. II .Teil Berlin： W.Moeser Buchhandlung,1-122.

Salomon, Alice(1902a) Soziale Frauenpflichten. Berlin: O.Liebmann.

Salomon, Alice(1902b) Das Problem der Mutterschaftsversicherung. In: Die Frau, 9.Jg., Nr. 12, Sept. 1902, 722-732.

Salomon, Alice(1906) Die Ursachen der ungleichen Entlohnung von Männer- und Frauenarbeit.[Phil. Diss.] (= Staats- und sozialwissenschaftliche Forschungen, hrsg. v. G. Schmoller und M. Sering, Nr. 122), Leipzig:Duncker & Humblot.

Salomon, Alice(1908b) Mutterschutz und Mutterschaftsversicherung. (Stenographischer Bericht über die Verhandlungen der 28. Jahresversammlung des deutshen Vereins für Armenpflege und Wohltätigkeit am 17. und 18. Sept.1908 in Hannover) (=Schriften des deutschen Vereins für Armenpflege und Wohltätigkeit, H.87).

Salomon, Alice(1908c) Die Entwicklung der Theorie der Frauenbewegung: Literatur zur Frauenfrage. In: Aichiv für Sozialwissenschaft und sozialpoltik. 26.Bd., Nr. 2., März 1908, 451-500.

2. ザロモン自叙伝

Salomon, Alice(1928) Jugend- und Arbeitserinnerungen. In: Kern, Elga (Hg.) Führende Frauen Europas. In sechzehn Selbstschilderungen. München: Reinhardt, 3-34; Auszüge in: Bettina Conrad u. Ulrike Leischner(1999)(Hg.) Führende Frauen Europas. Elga Kerns Standardwerk von 1928/1930, München: Reinhardt, 108-121 (=1938, アリス・ザロモン著/池川清訳「後編　自叙傳(續)——生い立ちと女子社會事業人養成の使命」『社会事業研究』26巻2号，43-57; 26巻4号，53-62) dazu In: Feustel, Adriane(Hg.) Frauenemanzipation und soziale Verantwortung: Ausgewählte Schriften. 3 Bd.: 1919-1948.Neuwied/Kriftel/Berlin: Luchterhand, 383-403.

Salomon, Alice(1983) Charakter ist Schicksal: Lebenserinnerungen.(Aus dem Englischen übersetzt von Rolf Landwehr, hg.von Rüdeger Baron und Rolf Landwehr. Mit einem Nachwort von Joachim Wieler) Weinheim/Basel: Belz Verlag.

Salomon, Alice(2004) Character is Destiny. The Autobiography of Alice Salomon. (edited by Andrew Lees)Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Salomon, Alice (2008) Lebenserinnerungen. Jugendjahre, Sozialarbeit, Frauenbewegung, Exil. Frankfurt a. M.: Brandes & Apsel. (Frühere Ausg. u.d.T.: Salomon, Alice: Charakter ist Schicksal)

3. ザロモン著作集

Salomon, Alice(1997) Frauenemanzipation und soziale Verantwortung: Ausgewählte Schriften, 1 Bd.: 1896-1908. (Hg.von Adriane Feustel) Neuwied/Kriftell/Berlin: Luchterhand. (略記 Ausgew.Schr., Bd.1)

Salomon, Alice(2004) Frauenemanzipation und soziale Verantwortung: Ausgewählte Schriften, 3 Bd.: 1919-1948.(Hg.von Adriane Feustel) Neuwied/Kriftell/Berlin: Luchterhand. (略記 Ausgew.Schr., Bd.3)

4. 項目別ザロモン初期著作（一部中期含む）

［ベルリン女子社会事業学校テキスト類］

Salomon, Alice(1908a) Soziale Frauenbildung. Leipzig/Berlin: B.G.Teubner. 96 S. [Die soziale Ausbildung in der „Frauenschule", 1-34; Die Ausbildung zur sozialen Hilfsarbeit, 35-85]

Salomon, Alice(1909) Einführung in die Volkswirtschaftslehre. Ein Lehrbuch für Frauenschulen. (2.Aufl. 1913, 3. Aufl. 1917, 4. Aufl. 1920, 6.Aufl. 1923, 7.Aufl. 1926, 8. Aufl. 1928: Nebst; Margarete Treuge, Einführung in die Bürgerkunde. Ein Leitfaden für Frauenschulen), Leipzig/Berlin: Teubner, 115 S.

［グループ報告］

Salomon, Alice(1912) Jugendgruppen und Gruppen für soziale Hilfsarbeit. Ihre Entwicklung und ihre Arbeitsmethoden. Karlsruhe: G.Braunsche Hofbuchdruckerei u. Verlag.

Salomon, Alice(1913) Zwanzig Jahre Soziale Hilfsarbeit. Karlsruhe: G.Braunsche Hofbuchdruckerei u. Verlag.

5. その他

岡田英己子(2009)「A.ザロモン像再考：ボランティア・グループの二種類の『呼びかけ』を手がかりにして」『人文学報』首都大学東京都市教養学部人文・社会系/都立大学人文学部, 409号, 1-21.

岡田英己子(2010)「ドイツ史におけるフェミニズムと母性：新たなジレンマ？」を手がかりにして」『人文学報』首都大学東京都市教養学部人文・社会系/都立大学人文学部, 424号, 19-41.

岡田英己子(2011)「国際ソーシャルワーク教育年表に見るA.ザロモンの位置—比較ソーシャルワーク教育史試論のたたき台として」『人文学報』首都大学東京都市教養学部人文・社会系/都立大学人文学部, 439号, 1-26.

栗原涼子(2009)『アメリカの第一波フェミニズム運動史』ドメス出版

竹村和子(2000)『フェミニズム』岩波書店

Peters, Dietlinde(1984) Mütterlichkeit im Kaiserreich. Die bürgerliche Frauenbwegung und der soziale Beruf der Frau. Bielefeld: Kleine Verlag.

Wendt, Wolf Rainer(2008[5]) Geschichte der Sozialen Arbeit. Bd.1., Stuttgart: Lucius & Lucius.